

## 三月十一日の私

松田妙子

三月号の光円寺のエッセイ、「日本人の誇りとナシヨナリズム」について書き始めて、私の手には余る問題だ、と苦心しているうちに、三月十一日が過ぎてしまいました。夜、原稿に向かっても、続きを書く気になれません。「3・11」の重さに圧倒されて、他のことに頭が回らないのです。だから今回は、三月十一日の私について、ちょっと書くだけにします。

かねてよりいろんな方面から誘いを受けていた、大阪・中之島での大規模な反原発デモに参加しました。往路の電車の中で、隣に座った二人連れの婦人の様子から、私と同じ目的地を目指す人だと直感。思い切つて声を掛けて、三人で梅田から中之島まで歩いて行きました。広場を埋め尽くす人々の群れの中に、私の見知った顔が幾つもありました。寒風吹きすさぶ中での集会、午後二時四十六分の黙禱。そして時折冷たい雨の降る中を、御堂筋を南へ、一時間半ほどかけてデモ行進。途中、「北御堂」「南御堂」と書かれた大きな看板のある二つのお寺を通り過ぎ、「ああ、それで御堂筋と呼ぶのか」と、初めて知りました。東本願寺の別院ということ、「南御堂」には、「今、いのちがあなたを生きている」の、見慣れた言葉が。ちよつとくすぐったいような気分になりました。

何人もの知人と言葉をかわしながら、神戸まで帰つて来て、ホームセンターに立ち寄りしました。出がけに懐中電灯がつかなくなっているのに気づいて、不安だったからです。とりあえず電池を買いましたが、本体の故障かもしれないから、新しい懐中電灯を見ようとして、見当たりません。店員に訊いて、やつと二階の、一番奥まった場所で見つけました。どうしてもつと手近な、目立つ所に置いておかないのだから？きょうは三月十一日だというのに！いや、三月十一日だから

といって、ことさらにレジの横などに「防災用品コーナー」を設けるのも、不謹慎かな、という気持ちと、この辺の人々は、もう「3・11」を忘れかけているんだらうか、というちよつと悲しい気持ち。ううん、忘れたわけではないだろう。でもきつと、忘れたいのだ。あまりに恐ろしい記憶にとられ続けるのは、辛いから。日々の雑事を積み重ねて、「平常心」を取り戻したいのだ。でも、私たちはもう、「3・11以前の日本」には戻れない。それは、起こってしまったことだから。みんなが知っていて、忘れてはいけないと思う一方で、忘れてしまいたくて、そして一年が経ったのだ……。

帰宅してすぐ、姉から電話がありました。明日の父の胃の検査の付き添いについての相談。そう、父が胃癌の手術をしてから一年目でもあるのです。あの時は、父と母が別々の病院に入院していて、その見舞いだけでも大変でした。東日本大震災発生時の報は、母の入院先の病院で受けました。その母ももういません。時はゆるゆると流れて行きます。傷ついた私たちの上を。

アパートの集合郵便受けに、見慣れぬ人の名前が貼つてあるのを見て、新しい人が入ったのかと思ひ、三月は移動の季節でもあったのだと気づきました。私が住んで、いるのはワンルールのアパートなので、住んでいるのは一人暮らしのお年寄りか、学生です。新しくこの近くの大学に入学する学生さんが、引越してきたようです。ここにも時は流れています。

「3・11」以降の一年を、皆はどう過ごしたのでしよう。去つたいのちがあり、新しく来たいのちがあり……。一年目の三月十一日、御堂のある御堂筋を歩きながら反原発を叫ぶデモの途中に見た、「今、いのちがあなたを生きている」の文字が、私に何かを語りかけているようです。